



MOON CHILD



All men by nature desire knowledge.



雲に覆われ星ひとつない空に、欠けた三日月がぼんやりと霞む。

霧の湖畔に佇む紅い悪魔の館には、今宵も怪異が群れていた。花壇を照らしカボチャ悪霊の青白い火が舞い、尖塔の下で蝙蝠たちが鳴き喚く。廊下にはお化けシート^{ガイスト}が身を翻し、広間で執事服に身を整えたゾンビたちが片目を垂らしながら優雅に一礼。

食堂では屋敷^{ホツ}しも妖精と妖精メイドたちが給仕を務め、メイド長十六夜咲夜が腕を振ったデイナーが食卓を彩る。今宵の宴は館の主の故郷を思わせるワラキア料理だ。

「……ふん」

というのに、永遠に紅き幼き月、レミリア・スカーレットの表情は晴れない。食べこぼしのブラッディソースに汚れたエプロンを外し、くしやりと握りしめる。

塵も残さず灰滅^{アッシュ}するエプロンを尻目に、レミリアは視線でメイド長に食後のお茶を要求した。わずかの間も置かず、卓上にはブラッディフレーザーのミルクティが並ぶ。

紅の雫が広がる紅茶を優雅に傾けながら、幼き吸血鬼は小さく口を尖らせた。

「フランもパチェも、いったい何をしてるのかしらね」

不機嫌なレミリアの視線の先、バロックの装飾も美しき食堂の卓には席が三つ。館の主であるレミリアと、その妹フランドール、そして顧問錬金術師たるパチュリー・ノーレッジの

ためのものだ。

が、テーブルの席は、主のひとつを除いてどちらも空席だった。

「妹様はまだお休みのようです」

「……また昼過ぎまで起きてたのね」

四百数十年ぶりに外出許可を出したというのに、悪魔の妹の生活はむしろ不規則になるばかり。不機嫌にゆがめた口元に牙を覗かせて、レミリアはテーブルに肘をつく。

「パチエもこのところずっと顔を見せないし。最後に顔を合わせたのつて、万魔節の時くらいじゃないかしら」
ハロウィーン

「そう言えばそうですね？」

応じたのはテーブルの反対側に控える門番の紅美鈴だった。

「ここしばらく、図書館への侵入者もなく、だいぶ仕事が暇なんですよ」

「……ま、門番が暇なのはいいことね」

言外に釘を刺しながら、レミリアは隣に控えるメイド長のほうを見た。

「咲夜、何か聞いていないの？」

「いえ。……すみません。解りかねます。お食事はお運びしているのですが」

館のことならばなんだつて把握している完璧で瀟洒な従者までがそう答えたもので、皆の視線は自然とその傍に控えていた司書の小悪魔へと向けられた。が、彼女も慌てて手を振り、

「その、私も工房アトリエの中までは入らせては頂いてないんです。パチュリー様は新しい錬金術の儀式の用意をされていて、それで随分根を詰めてらっしゃるようでしたけど……」

「……真理の探究は結構なことだけど、それでもう何ヶ月になるのよ？」

折り数える指が片手で足りなくなつたところで、レミリアは呆れと共に頬杖をついた。紅茶をティースプーンでくるくるとかき回し、もう一度吐息。悪魔の館の当主にとって、思うままにならない住人達は常より悩みの種である。

「またぞろ、本に埋まつたまま一緒に懺でも生えて動けなくなつてゐるんじゃないでしょうね」
「あれは大変でしたねえ、掘り出すの……」

しみじみと美鈴が頷く。

『動かない大図書館』パチュリー・ノーレッジ。紅魔館の地下大図書館を根城とする七耀の魔法使いは、幻想郷きつての愛書狂である。彼女がいつたん読書に夢中になると寝食を忘れて没頭するのは今に始まつたことでもないのだが、半年近く図書館の奥に籠りっぱなしというのはさすがに何度も前例のあることではない。

先頃、大図書館は河童の協力により長年の懸案だつた懺と埃の環境改善に成功していた。万年喘息の苦痛からも解放され、本の虫たる彼女にはまさに夢のような環境であろうが――
「咲夜。あとで様子を見に行きなさい。手遅れになつてからじゃ面倒よ」

「判りました」

表情を崩さず応える咲夜に、ひとまず満足してレミリアが紅茶を口に含んだ時――
「ぎい、と正面のドアが押しあけられ、噂の魔法使いが姿を見せる。」

足元までの長いローブにガウンを羽織り、月の衣装をあしらつたモブキャップ。パチュリーのいつもの姿は、けれど一つだけいつもと違つていた。

「久しぶりね、レミイ」
 ゆったりとしたローブの上から、もはつきりとわかるほど、大きく膨らんだおなかを抱えて、
 いつになく穏やかな表情のパチュリーに、レミリアが啞然として口を開け、こぼれた紅茶が
 紅き吸血鬼の胸元を汚す。

「……………」

「……………」

「……………え？」

「……はい？」

「ば、ぱちゅりーさま……!!」

呆然と瞬きをする皆の前で、動かない大図書館。知識と日陰の少女。パチュリー・ノーレ
 ツジは、いとおしげに大きなおなかを撫でてみせた。

▲MOON CHILD▼

豚^グの香辛料^ラグリル^タ、ロールキャベツ^ルのサワークリーム煮^マ、根菜の煮込み^レスープ^ア。レミリア
 と大差ない小食のはずのパチュリーは、旺盛な食欲でテーブルの上の料理を片付けてゆく。
 付け合わせの胡瓜の酢漬^ムけ^ラサラダ^トを口に運び、その味にふんわりと表情を緩める様子は、普

段の陰気で無愛想な彼女からは想像もつかないもので。

「美味しい。……咲夜、また腕を上げたわね」

「あ、はい、いえ。その」

一人、遅いディナーに舌鼓を打つパチュリーを遠巻きにして、レミリア達は自然とテーブルの端に集まっていた。

無論、皆の視線はまあるく膨らんだパチュリーのお腹に釘付けである。

「え、……あれ？ え？ パチエ？」

「お、お嬢様、冷静につ」

混乱の極みにあるレミリアにすかさず咲夜がフオローを入れようとするが、パーフェクトメイドも今回ばかりは動揺を隠せない。

「ねえ咲夜。もう少しお代わりしてもいいかしら？」

「あ、は、はい、ただいま!!」

時を停めるのも忘れて、メイド長は新人のように厨房へと走り、料理を載せた台車を押して駆け戻ってくる。そんな彼女にパチュリーはねぎらいの声をかけた。

「ごめんなさい、遅れてきたくせに我儘ばかりで」

「い、いえ……」

まるで聖母のごとく、後光を背負って微笑むパチュリー慈愛の笑顔。その隣で咲夜はなんとか平静を取り繕おうとするが、配膳中に3回も手を滑らせかける有様だった。

「ありがとう。いつも大変ね、貴方も」

「ず、随分お召し上がりになるんですね？」

労いに応えつつ、咲夜がトウモロコシ粉粥を取り分けながら訊ねる。暗に、そのおなかは食べすぎが原因ですかそうですね良くあるオチですもんね!？」と聞いているのだ。

(ナイスよ咲夜!!)

(そ、そうですか? ずいぶん露骨な気が……)

ガッツポーズのお嬢様の横で、本音を漏らした美鈴のおでこに、帽子の上からすこんとナイフが突き刺さる。と苦悶の呻きとともに額を押さえてしやがみこむ美鈴をよそに、パチュリーは穏やかに微笑みを浮かべ、愛おしげにそつと大きなおなかを撫でた。

「ふふ、そうね。この子の分までちゃんと栄養を取らないと、ね」

びき。

痛いほどの、痛すぎるほどの沈黙が食堂を満たす。

せめて聞き間違いであればと願う皆の胸中を知ってか知らずか、パチュリーがナイフとフォークを動かす音だけが聞こえる。

「……ど」

はじめに声を発したのは、やはり当主のレミリアだった。

「ど、どうしよう、どうしよう咲夜っ!？」

「お、落ち着いてくださいお嬢様っ」

百年來の友人の思わぬ姿に、紅いカリスマも雲散霧消。やってきた咲夜に縋り付き、レミリアは取り乱した様子で声を震わせる。

「だつて、だつてパチエが……!」

「そ、その。お気持ちはお察しますが……そうですわお嬢様。パチュリー様のご友人として一言、身を案じるのは決して不自然ではないかと思いますが!」

名案だとはかりに頷く一同。咲夜のその発言は、いつそ清々しいほどに責任丸投げだったのだが――紅魔館の主としてこの場を収められるのは自分しかないと思ったか、レミリアは蒼白な顔に決意の表情を浮かべ、パチュリーのほうへと歩きだす。

テーブルまで近づいたレミリアは、錆びついたミシンのように、ぎぎぎ、とこわばった動きでパチュリーの隣へと腰をおろした。

「こ、こんばんわパチエ」

「……あら。なあに、今更?」

「今日も、い、いい天気ね」

「……そうかしら?」

ちらりと魔女が視線を窓に向ければ、空を覆う雲は分厚さを増し、月のひとつどころか星明かりすら見えない。

「きゅ、吸血鬼的にはよ」

強引に誤魔化しつつ、レミリアは自分のティーカップを手を取った。かちやかちやと明らかに動揺が現れた指先が、冷めた紅茶の雫をテーブルに飛ばす。

（お嬢様、頑張ってくださいっ）

従者一同の無言の視線を背中に受け、レミリアは一度大きく息を吸って、視線を魔女の大きなおなかに向け――

「それで、その……誰にやられたの？」

……しばし、間があった。

緊張のあまり最悪の地雷を踏み抜いた最悪の一言を放ってしまったレミリアに、やつちまった！、という空気で一同が頭を抱える。永き夜を支配するの悪魔の王といえども、永遠に幼き吸血鬼には難題であったというのだろうか。そんな中。

「厭ね、そんなこと今更言わせる気なの？ レミイ」

ほんのわずか頬を赤くし、くす、と口元を緩めて。パチュリーは慈母のいつくしみを見せながらローブに包まれたおなかを撫でる。

もはや食堂に満ちた空気に耐えきれず、レミリアは涙目で皆のほうを振り返る。

（さ、咲夜あゝっ!!）

（お、お嬢様、ファイトです!! こゝでくじけちゃ駄目ですよ!! ほら美鈴、あなたも応援しなさいっ）

（ふあ、ファイトですお嬢様っ）

無責任に応援する従者達の期待を一身に背負いながら、レミリアは再度、パチュリーに話

しかける。

「で、でも、大事なことでしょう?」

「そうね……大事よね」

ふう、と憂いを帯びた魔女の視線が、まるく膨らんだおなかへと落ちる。神秘のゆりかごに抱かれた小さな生命に語りかけるように、魔女の手がゆつくりと優しくそこに触れた。

(さ、さくやあゝゝッ!?)

(お嬢様っ!! 負けないでください!! 咲夜は信じています!)

背中越しのメイド長の応援に退路を断たれ、もはや涙をにじませながら、レミリアはそれでも必死に夜闇を統べる吸血鬼の貫録を保ちつつ、椅子に腰掛けなおし――

「し、式はいつかしら?」

「……式?」

料理を口に運びながら瞬きをするパチュリーに、レミリアは頬を赤くしながらそっぽを向きつつ、

「え、ええ。必要でしょうか? その、パチエだつてそのほうが」

「……そうね。式か。ふふ。きちんと出来ればいいわね。……この子のためにも」

「そ、そう……」

遠い目でそつとお腹をさすり、微笑むパチュリーに、とうとう五百年を生きる吸血鬼も音を上げた。駆け落ちるようにして椅子から降り、はいずるように従者達のもとへ戻ってゆく。

「うううう……さくや、さくやあゝ……がんばったもん、私がんばったもんっ……」

「ああ、お嬢様っ……!! っ立派でした……!」

泣き崩れるレミリアを必死と抱きしめるメイド長に、美鈴と小悪魔もそつと涙をぬぐう。敗れはしたが、紅魔館の主たる務めを立派に果たした幼く紅い吸血鬼に、忠誠を新たにする従者3人。

「と、ともかく、パツチエさんのおなかに赤ちゃんがいるのは……」

「間違い、ないみたいね……」

咲夜と美鈴は小声でそう囁き交わす。気のせいや勘違いで済ませることはできそうもなかった。そうであればどれほど良かったか。

と、なれば。皆の視線は満場一致で一人へと向けられる。

「……………」

「ち、ちがいますよ!! 何で私のほう見るんですか皆さんっ!!」

いきなり容疑者筆頭候補にさせられた小悪魔が叫ぶが、その程度で追及の手が緩もうはずもない。

「だって」

「ねえ?」

「淫魔ですし」

「ひ、酷い濡れ衣っ!! 違いますよ! そもそもなんかいつのまにか定説っぽくなっちゃってますけど、わたし夜魔^{サキュバス}なんかじゃありませんし!! 仮にもしそうだったとしても、女の子にそういうことするのは雄^{インキュバス}のほうですし! 第一、そういうのって食事なんですから

ね！ 妊娠なんかさせませんよ!! 知らないでしょうけど悪魔の胤つてすごく着床にくいんですから!?

魔界の少子化問題とかもう千年前から喫緊の課題なんですからね!!」

あらん限りの声を張り上げて力説する小悪魔に、まだ疑念は残しながらも、レミリアは紅くなった目元を擦りながら口をとがらせる。

「……じゃあ、誰なのよ、相手は」

「それは……」

小悪魔は、順に一同の顔を見回してゆく。そもそもパチュリの交友関係は、人妖ひしめく幻想郷にあつてもさほど広いものではない。二つ名の通り、一年の大半は図書館にこもって読書か、魔法の研究に勤しんでいるのが常だ。生来の喘息の気もあり、皆の知らないところで活発に歩いていることはまずないと考えていい。

と、なれば。

「普通に考えれば……このお屋敷に出入りしているどなたか、ということに」

「……………」

小悪魔の言葉に、その場の全員が思い描いた人物像はびたりと一致していた。

時に奔放で、時に乙女な白黒の魔法使い。……ああ。持ってかないでーされてしまったのはあなたの心だけじゃなく他にも色々あったというのか。

「いや、待て。あれも一応は女だろう?」

「どうでしょうか。仮にも魔法使いなんですから、生やすとかなんとかそれくらい簡単にできそうな気がしますけれど?」

キノコ魔法とか使ってますし、と相槌を打つ咲夜の言葉に、小悪魔は偏見ですよう、と涙目で抗議する。

「簡単に言いますけど、そんなに単純なものじゃないですよ!?! 見てくれならともかく、生殖能力まで含めた性転換なんて、ランプ^{ランプリ}級の魔神^{マゴト}でも叶えられるかどうかの高難度ですよ。生殖器以外にも脳梁とか骨盤とか変えるところは山ほどありますし、元に戻れるようにするなんてもっと大変です。人間の魔法使いに、そう簡単にできるようなことじゃ……」

「つてことは、パツチエさん自身がお願いした、とか?」

「……………」

美鈴の言葉に一同が黙る。

パチユリーが、『彼女』に並々ならぬ関心を抱いていることはすでに周知の事実である。傍から見れば素っ気ない対応ではあるうが、そもそもこの百年、館の者を除けば他者にまともに興味すら持っていなかった日陰の魔女が、積極的に会話をする相手が増えたというのは驚くべき事実だ。

「……けど、それでも……」

と、レミリアが苦虫を噛み潰したような顔をしたその時。

「おはよー、おねーさま」

どかん、とドアを吹っ飛ばして、食堂の反対側から色鮮やかな翼を揺らし、金髪の少女が現れる。最後までこの場に姿を見せていなかった、レミリアの妹フランドールだ。

サイドテールに結んだ金髪を揺らし、悪魔の妹は牙を覗かせながらふわああ、と大欠伸を

ひとつ。いつもならレミリアもはしらないと叱るところだが、今日のお姉様にはそんな余裕も威厳もない。

緊張感漂う食堂の気配もどこ吹く風と、妹様は自分の席へととてと歩いてゆき――

「あれ、パチュリー。珍しいのね」

「ええ、こんばんわ」

久しぶりに顔を合わせた知識と日陰の少女と挨拶を交わしたフランドールは、すぐにパチュリーのまんまるのお腹に気づいて、あれ？と首を傾げた。

「……？ どうしたの、そのおなか？ 食べ過ぎたの？」

流石は筋金入りの箱入り娘、満495歳の妹様。無垢な笑顔での問いかけに、場の空気がさらに張り詰める。固唾を飲んで見守る一同の中、パチュリーは穏やかに微笑んで、とうとう決定的な一言を口にした。

「違いわ。お腹にね、赤ちゃんがいるのよ」

((言っちゃった……!!))

これまであれこれ言いながらも、やっぱり聞き間違いじゃなからうかと心のどこかで願っていたレミリア達の最後の希望を根こそぎ吹き飛ばし、パチュリーはそつと新しい生命の芽吹いたおなかをさする。

「あか、ちゃん？」

こくん、とさらに首を横に倒すフランに、パチュリーは静かに頷いてみせた。

「えー!? 本当？ 本当なの？」

知りたがりの妹様は目を丸くし、ふわりと宙を舞ってパチュリーの隣の席に飛び移る。

「パチュリーのおなかに？ 赤ちゃん？ ほんとに!? ねえつ、ねえねえ! ……じゃあ、

パチュリーって、お母さんのの?」

「ええ。触ってみる?」

「いいの!? ……あ、でも……」

思わぬ申し出にいったんは顔を輝かせたものの、自分の能力を思い出したか、不安そうな顔でパチュリーを見上げるフランドール。しかし母は強し。パチュリーはそんなフランドールの頭をそつと撫で、柔らかに言い聞かせる。

「大丈夫よ。優しくしてあげてね?」

「う、うん……」

およそ5世紀の人生においても、こんなことは初体験なのだろう。悪魔の妹様も流石に緊張しながら、ゆつくりとパチュリーの腹部へと手を伸ばしてゆく。

（ちよ、ちよつと、止めなくていいんですか!? お嬢様!）

（そ、そうだけどつ……）

パチュリーの、そしておなかの小さな命の事を考えるならば、止めに入るべきだ。それはレミリアも理解していた。フランドールの能力は不安定で、いづどんな不測の事態が起きてもおかしくない。まして緊張や精神への負担は、情緒不安定な妹の心にさらに悪影響を及ぼしかねなかった。

だが——レミリアは動けない。あんなにも優しげな顔をしているパチュリーの邪魔をする

ことは、どうしてもできなかった。沈黙を守ったままの紅魔館の主と、パチュリーの間で、従者たちただ成り行きを見守ることしかできない。

緊張に強張り、わずかに震えるフランの手がそつと——これ以上ないくらいの慎重さで、ゆつくりと、七耀の魔女のおおきなおなかへと触れる。

「……っ」

「怖がらなくてもいいわ。……ね？」

思わずギュツと閉じかけたフランドールの小さな手のひらを、パチュリーの手がそつと包み込んだ。そして。

「あ、動いたっ!？」

「わかる？」

「うん……あ、また!!」

ばあ、と顔を輝かせ、フランは子供のようにはしゃいで背中中の羽根を開閉させる。いびつな羽根を飾る七色の宝石が、しやらりと涼やかな音を響かせた。

たった二人だけになった吸血鬼の血族の、末の妹として。彼女が初めて触れる、芽生えたばかりの小さな命。確かな息遣いを感じさせる胎動に触れて、妹様の頬にも薄く朱がさす。

「わあ……ホントだ。ホントに赤ちゃんだっ」

興奮を隠せないフランドールの額にかかる前髪をやさしく払いのけ、パチュリーはいとおしげに眼を細める。

そんな光景に、なぜだか心がざわついて仕方がないレミリアは、思わず隣にいた咲夜のス

カートの裾をつかんでいた。

「良かったらお話ししてあげて。赤ちゃんにも」

「……聞こえてるの？ パチキュリー、分かるんだ？ すごいねっ」

「ええ。ちゃんとお返事してくれてるわ」

パチキュリーに促され、フランドールはそつとそのおなかに耳をつけ、小さな生命と言葉を交わす。とくん、とくん。小さな鼓動に目を細め、フランドールは穏やかな顔で目を閉じる。

いつになく、妹様の表情が笑顔に溢れているのを見て、成り行きを見守っていた従者一同はようやく胸を撫で下ろしていた。

「うん。……とっても元気な赤ちゃんね」

「ええ。フラン。あなたもこうして生まれてきたのよ？」

「わたしも？」

「ええ。あなたが生まれる前の事、レミィに聞かせてもらったことがあるの。あなただけじゃないわ。咲夜も、霊夢たちもそうね」

「へえー……」

驚きに目を丸くして、けれど素直に頷くフランドール。生まれて495年目にして受けた情操教育は、妹様にとても良い刺激をあたえているようだった。

……が、それはさておき。

「あ、あの、お嬢様、どちらへ？」

「……ごめん、もう色々限界……」

レミリアにとつてはこのあたりがとどめになった。胸の奥でいろんなものが許容量を超えて溢れ出すのを感じ取って、レミリアはふらふらと食堂を後にするのだった。



場所を移し、紅魔の館の二階。普段はあまり使われない客間の一室で、レミリアを囲むように館内の責任者が集っていた。

……とは言え先程までと顔ぶれが違う訳でもない。メイド長の咲夜、門番の美鈴、使用人代表としての小悪魔だ。なお、フランドールは話がややこしくなりそうだからというレミリアの一存で同席はしていない。

議題は無論、パチュリーの妊娠について。

「とりあえずこの問題については、パチエ本人についてはできるだけ触れない方向で調査を進めるわ。異存はないわね」

議長席のレミリアにこくこくとうなずく一同。

「早急に原因の調査と、真相の究明を進めること。この際手段の是非は問わないわ」

「で、でもお嬢様、真相って言っても……」

「わかってるわよ!？」

もはや、七耀の魔法使いの懐胎は疑うべくもない。今更冗談でしたー、というようなオチでないことだけは明瞭である。

「ほっとけないでしょう。……その、親友のことなんだから」

ぶつきらぼうに口を尖らせるレミリア。どんな経緯であれ、パチュリーの様子は明らかに訳ありとは思えない。

百年来の友人は、もしかしたら恐ろしく不幸な目に（オークとか触手とか苗床とか）遭っており、それでも健気に耐えているのかもしれない。それを黙って見過ごせるほど、この永遠に紅き吸血鬼は冷酷ではないらしかった。

「でも、あれは流石に心臓に悪いわね……」

「ですええ。余計な気ばかり使っちゃって……なんかものすごく疲れました」

美鈴の台詞は、皆の気持ちを代弁していた。フランとのやりとりはまさに薄氷の上を踏むかの如し。咲夜ですら疲労の色は隠せない。この場の全員、それなりに長く生きているのだが、こうした経験にはとにかく乏しいのである。

ぐったりとテーブルに頬杖をついて、レミリアは据わった目を咲夜に向ける。

「ねえ咲夜、パチエの時間だけ1年くらいすつとぼすとかできないの？」

「申し訳ありません。他人の時間にまで干渉するのは不可能なようです。お嬢様」

それが可能なら、どんな相手だろうと咲夜には叶わないだろう。完全に瀟洒なメイドが可能とする時間操作は、あくまで自分を起点にするものだ。時間というものが主観である以上、咲夜の力は他人のみを対象にすることはできない。

落胆と共にテーブルに突っ伏したレミリアはか細い声で呻く。

「……あんなの、いつまで続くわけ？」

「ええと、場合によりますが……普通なら生まれるまで10か月くらいでしょうか？　ですから、最低でもあとひと月かふた月か……」

「そんなにやられてたら、気疲れて死ぬわよ、私」

不老不死の吸血鬼にあっさりと死を口にさせてしまうほど、今回の事態は差し迫っているらしかった。それを見て、咲夜はよろしいでしょうかと挙手をして発言を求める。

「あのう、決してお嬢様を疑うわけではないのですが、パチュリー様の……あの状況について、無意識のうちにでもそうした運命を操ったというようなことは……」

「ないわよ。っていうかもう戻そうとしてみたけど、無理」

テーブルに右のたほつぺたを押しつけ、レミリアはぼやく。

「そもそもパチエ一人の運命じゃないものね、今更だけど。百年も一緒にいて、あんなパチエ初めて見たわよ……」

「お嬢様……」

くしゃくしゃと髪をかき乱すレミリアをいたわるように、咲夜が隣に歩み寄る。

犬猫の子供などとは訳が違う。あんなに幸せそうな魔女の笑顔を目の当たりにして、その運命を弄くるといふのは、この紅い暴君とて気が咎めるものらしい。

「とにかく。パチエ本人をどうこうするのはやめましょう。それよりも今はもっと大事なことがあるわ」

「……はい」

紅魔館の主の意を汲んで、一同が頷く。レミリアが気力を奮い立たせて、身体を起こした

とき。

侵入者を知らせる甲高いベルの音が、屋敷全体に響き渡った。

「――来たッ!!」

「咲夜っ!!」

「承知しました!!」

椅子を蹴とばして立ち上がったレミリアの指示に、完璧なメイドが姿を消す。

「私達も行くわよ!!」

「はいっ」

「は、はい!!」

美鈴と小悪魔を引き連れて、レミリアも迷うことなくその後を追った。



「よー。邪魔するぜー」

明り取りの窓を器用に破って地下の図書館に侵入した白黒の魔法使いは、箒の上から鼻歌混じりに警備の様子を確認する。

巨大な空間を埋めるのは、まさに書の峡谷とばかりに積み上げられた本棚。魔道書、稀覯本、禁書の類が所狭し詰め込まれた書架の隙間に視線を巡らせ、魔理沙は三角帽子のつばを軽く持ち上げた。

「ありや、今日は誰もいないのか？ 都合がいいな」

迎撃に飛び出してくる使い魔^{アガシオン}や図書館の主がいらないのを確認し、設置されたトラップもお座成りのものしかないことを一目で看破した魔理沙は、申し訳程度の挨拶もそこそこに本棚へと飛び移り、中身を物色しようとする。その時。

「そこまでよ」

「うおっ!？」

わずかな前触れも予兆すらもなく。白黒魔法使いの周囲を、蟻の這い出る隙間もないほどに、無数のナイフが取り囲む。

箒上の魔法使いの首筋に、背後から尖った銀刃を押し付けて、完璧で瀟洒なメイドが忠実に職務を執行していた。

「よし、良くやったわ咲夜!! —— 美鈴、小悪魔っ」

「はい!!」

敏感に危機を察し、煙幕を張って逃げ出そうとした魔理沙を、さらに小悪魔の弾幕が包みこみ、対抗呪文を繰り出して魔法を相殺。同時に地に蹴って間合いを詰めた美鈴が、箒の上から白黒を蹴り落とし、床上に押し倒して取り押さえる。

「っ、な、なんだなんだなんだっ!？」

いつもと同じように侵入した図書館に、紅魔館の全戦力のほとんどが集中していたことに、魔理沙は驚愕を禁じえないようだった。

「チェックメイトよ人間。無駄な抵抗は時間の無駄だと知りなさい」

「は……っ、なんか知らんがやなこったぜ」

しかし、魔理沙もこの程度で屈するほど往生際のいい魔法使いではない。こつそりスカートの裏側のポケットに手をしのばせ、星状弾幕精製用の金平糖を掴み出そうとする。

「無駄だと言っているのよ」

その運命を捻じ曲げて。レミリアは金平糖の瓶を床の向こうへ蹴り飛ばし、魔理沙の眼前に出力を絞らないままの紅い魔槍の切っ先を突き付けた。

「ねえ咲夜。人間って手足がなくても喋るのに支障はないと思うから、遠慮はしなくてもいいのよね？」

「……一本くらいなら命に別状はないかと」

「そうね」

「いや待て!! あるぜ!! 思いつきり別状あるぜ?!」

「なら大人しく捕まりなさい。いいわね？」

有無を言わせぬ迫力に、魔理沙は冷や汗をこぼしながら、こくこくと頷くばかりだった。



「と言うわけで、最有力の容疑者を尋問するわ。あんたが父親ね？ つーかそれしか考えられない。もう違ってもいいから認知しなさい」

「何の話だっ!!」

図書館の椅子にがんじがらめに縛られて、身動きを封じられた魔理沙を、従者たちが取り囲む。

レミリアは喚く白黒の前に歩み寄り、紅い爪を軋ませながら魔理沙の顔をねめつけた。

「どうもこうもないわよ、とぼけないで」

「だから何の話かさっぱりわからないぜ!」

身体の自由を奪われても、魔理沙はなおも屈してはいなかった。激しい抵抗を試みる魔法使いに、レミリアはいらだちと共に髪を掻き毟る。

「白々しい。……あなたしか考えられないのよ。いったい何のつもりでパチエにあんなことをしたの。答えなさい。内容によっては殺すわ。言うかどうせ口くなことじゃないんだろうからすぐ殺すわ」

「だから説明くらいしろ!」 パチユリーにつて何の話だ? なあレミリア、なんのことだかさっぱり分からないんだが」

「……ああもう、咲夜!!」

わずかに顔を赤くしてレミリアがメイド長の名を呼ぶと、咲夜は軽く一礼をして魔理沙の傍に歩み寄る。

「お、な、なんだ?」

動揺する魔理沙をよそに、咲夜はしごく事務的な動作で少女に耳打ちした。

「——が——して、それが——」

「……………っ?!」

話の途中で魔理沙の頭がぼん、と湯気を吹いた。おそろおそろ、レミリア達の顔を見比べ、なんとも言えない洗面を作る。

「……マジでか？」

「そうよ」

眼を剥いて絶句する魔理沙の前に、吸血鬼は重々しくうなずいた。

「で、どう考えても犯人は貴方でしょう。はやく白状しなさい」

「いや待て!」

一言でもそれっぽいことを口にした瞬間、即刻処刑タイムの始まりそんな状況に、魔理沙は涙まで浮かべて首を振った。

「違う、違うぜ!? 誓ってそんなことしてないぜ!」

「嘘ね。あんたが茸の触媒なんて破廉恥な魔法使ってるのは先刻承知なのよ。怪しい魔法で汚らわしいものを生やして、パチエの躰を好き放題弄んだんでしょ。せめて往生際良く白状しなさい。苦しませずに済ませてあげるから」

「話を聞けーっ!?! そんなんでたらめだ! 濡れ衣もいいところだぜ!」

じたばたと暴れる魔理沙は、椅子の脚をがくがくと揺すりながら喚く。

「そ、それにだな、その、まだ、私は、その……そういうのは……」

「なによ。よく聞こえないわ」

「とにかくっ!! 断じて私じゃないぜ!! 言い張るのは勝手だが、もし違ってたかどうかするつもりだ!」

「開きなおるのがますます怪しいわ」

「……聞けよ人の話!!」

「五月蠅いわね、あんた以外に考えらんないのよ!」

「……………」

「……………」

固唾をのんで見守る一同の中、ぜいぜいと息を荒げる魔理沙と、レミリアの視線が、しばし交差する。

「……本当ね?」

「ああ。誓うぜ。断じて私じゃない」

なおもしばらく、両者はじつと睨みあつてから——やがてレミリアは諦めたように表情から陰を抜く。維持していた紅の槍を消し、がっくりと肩を落とした。

「もう……じゃあ一体誰だつて言うの?」

「……お嬢様」

「な、なあ」

縛られたまま、魔理沙はいまだに信じられないという顔だ。

「本当なのか? その、パチュリーに……子供が、つて」

「本当よ。ここにいる全員がしっかり見てるわ。パチエも自分で認めてるしね」

「マジか……」

さしもの魔理沙も、これにはショックを隠せない様子だった。

その表情に演技が含まれているとは思えず、レミリアは吐息と共に魔理沙の解放を命じる。手首についた縄の痕を痛そうにさすりながら、床に座り込んでしまう魔理沙。

「ねえ魔理沙。なにか心当たりはないの？」

「……いや、そんな事言われても困るぜ」

「ごによごによと言葉を濁し、魔理沙はしばし考え込んだ。やがて、帽子のつばを下げて表情を隠しながら、

「その、合ってるかどうか知らないが、ひとつそれっぽい話がない……でもない」

「本当!？」

「いや、落ち着けて!! あくまで可能性の話だからな!？」

一斉に食いついてくる紅魔間の面々に詰め寄られ、魔理沙はたじろぎながらも続ける。

「私も文献で読んだだけなんだ。真偽までは確かじゃないぜ。……ひよつとしたらお前なら知ってるかもしれないが、もう何百年も昔、外の世界で魔女裁判が全盛期のときだ。確かその頃の記録に、卵を産んだ雄鶏が魔女として裁かれた記録がある」

「雄鶏が？」

「ニワトリって、あのニワトリですよね？」

神妙な顔をしているレミリアと咲夜の主従に対して、いまいち飲み込めていない様子の美鈴と小悪魔を見て、魔理沙はああ、と頷いた。

「当時は魔女裁判もいろいろ煮詰まっていた時期だな。さんざん妙なものが魔女に認定されてるんだ。修道女を襲った野犬とか、神父の指を挟んだクローゼットまでな。……まあそれは

置いとくぜ。本題じゃないしな。

いいか、ここで重要なのは、その雄鶏が卵を産んだって事だ。もちろん真偽は定かじゃない。雄鶏が産んだ卵からはバジリスクが孵るなんて言われてるが、実際、卵から何が生まれたのかは記録に残ってないんだ。それでもこの雄鶏は魔女だとされた。罪状は、本来卵を産めるはずがない雄鶏が、生命のありかたを歪めたってことだったそうだけ」

次第に魔理沙の言わんとする意味が呑み込めてきたのか、レミリアは表情を硬くする。

「……つまり、これはパチエの魔法だってこと？ よりパチエの理想とする、魔法使いに近づくための？」

「あくまで推測だけだな。……だいたい、パチエにそんな相手がいないってのは私よりお前のが分かっているんじゃないか、レミリア」

「……………」

レミリアは不機嫌に牙を軋らせた。魔理沙の言葉はいちいちもつともで、パチュリーが積極的に触れ合える異性など、幻想郷のどこにもいない。オークだの触手だのはそれこそ笑い話であろう。となれば、魔女の宿した生命は、処女懐胎によるものということになる。

「……まあ、パチュリーが、実際にそうだったのかは置いておくとして……。長い間図書館の工房に籠ってたのは間違いないんだろ。私が忍び込めたかどうかは、お前らのほうがよく分かっているんじゃないのか」

相手のいない懐胎。それを成せるのは神によるものか、さもなければ悪魔によるものでしかない。およそ、奇跡と悪魔の所業は表裏一体。そして、パチュリーは誰もが認める幻想郷屈

指の魔女だ。

「……………」

その場の皆が口をつぐむ中、そんな深刻な雰囲気をも、見事にぶち壊すように。

「まーりーさーっ!!」

わざわざドアの隣の壁を吹き飛ばして、現れたのは七色の羽根をはばたかせる妹様。悪魔の妹フランドールは、弾丸のように魔理沙の胸へと飛び込んでゆく。

「ふ、フラン……?」

小さいとはいえその膂力は人間の比ではない。下敷きになつて呻く魔理沙に馬乗りになつて、フランドールは顔を輝かせる。

「ねえ魔理沙!! わたしも赤ちゃんほしい!!」

「ぶっ!?!」

きらきらとした無垢な笑顔で言われ、魔理沙は思いつきり吹き出した。

「パチユリーに聞いたのよ。赤ちゃんは好きな人といっしょにつくるんだって!! だから

魔理沙、わたしに赤ちゃんちょうだい!! ねえ? ねえつてば!」

「……い、妹様……?」

さつきまでのシリウス成分はどこへやら。あどけない表情を見せながら、掴んだ細い指先を物欲しそうにぺろつと舐め、フランは魔理沙の上に覆いかぶさる。

「ねえ、魔理沙? いいでしょ?」

薄紅の唇から、尖った牙がちろりと覗く。帽子の下で片結わえされた金髪が、さらりと魔

法使いの頬にかかる。

「ふ、フラン？ 待て、落ち着け!!」

「……あんた、まさかとは思うけどフランにまで手を出してっ」

「いや、まて、誤解だーっ!!」

レミリアの視線が険しくなるなか、魔理沙は謂れない物言いに必死になって叫ぶ。

「パチュリーばっかりずるいわ。私もオトナにして?」

「ッ……咲夜!!」

命令一過、亜音速のナイフが銀光となって飛ぶ。とっさに首をひねった魔理沙の顔を薄く撫でるように、鋭い刃が床に突き立った。刃は柄元まで床の中に埋まり、その威力の凄まじさを物語っている。両の指に銀刃を束ね、忠実な猟犬が前に進み出た。

「排除はお任せください」

「やめてーっ!!」

暴れる魔理沙を押さえつけながら、フランドールはレミリアのほうを振り向いた。

「もう、お姉様までなんで邪魔するの!!」

「なんでって、放っておけないわよ!!」

「……じゃあお姉様でもいいわ! ねえ、わたしも赤ちゃん欲しいの!!」

「ふ、ふふふフラン、淑女がなんてはしたないっ!!」

悪戯っぽく口元の牙を舐め、迫る妹様。姉の威厳も形無しでうろたえるレミリアに抱き付いて、頬をすり寄せるフランドール。

……あれ、たぶん妹様はわかってやってるだろうな。と。
なんとなく、美鈴はそんな事を思った。



やがて。

なんだかんだと有耶無耶になっているうち、レミリアらの心配もよそに、ひと月もするとパチュリーのおなかは元に戻った。

紅い悪魔の館が託児所になることはなく、日陰の魔女の生活はすっかり元通り。読書と魔法で睡眠時間を削る不健康な毎日を送っている。

「……なによ、また来たの?」

あの慈母の微笑みは一時の幻だったとでもいうのか。薄暗いランプの明かりの下、泥水のような珈琲を啜り、魔道書の頁に埋めた顔をわずかに持ち上げ、来訪者を不機嫌な視線で睨むパチュリーの姿は、以前と何も変わりが無い。

けれど、客間の床は深々と咲夜のナイフの痕が残り、あれが夢だったのではないかという都合のいい想像を否定していた。

……その頃からだろうか。紅魔館地下の大図書館、書架の峡谷の狭間にある卓上に、小さなフラスコが配置された。

動かない大図書館が黙々と魔道書をめくるその傍らに、近づいて目を凝らせば。

封をされたフラスコの中には、ほんのりと燐光を放つ、白く小さなヒトガタが閉じ込められているのを見ることができた。

人間の幼児の姿をデフォルメしたかのようなそれこそは、曰く「フラスコの中の小人」へ月の仔」。生まれながらに万物の知識に通じるといふ神秘の生命体。かの大錬金術師ホーエンハイムによって為された、賢者の石に並ぶ錬金術の秘儀中の秘儀である。それが何処からもたらされたものか。魔女に答えを訊けるものはいなかった。フラスコの底に腰を下ろし、薄く張られた薄桃色のスープから、不機嫌そうに小さな本状の物質を生成しては、黙々と頁をめくる、どこかの誰かにそっくりなその姿に。レミリアは内心、友人への評価を改めざるを得なかったという。

(了)

【奥付】

「魔女の懐胎」 平成27年3月14日 紅のひろば12

発行 折葉坂三番地（折葉坂サンバンヂ） <http://orinazaka.dojin.com/info/blog/> 著者 銅あかがね おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 Project」の二次創作です。

